夢我物語　二

曽我物語巻第二目録

ならのこんそうつ事
たいさんぶくんの事
よりともいとうにおはせし事
わかぎみの御事
わうせうぐんの事
けんそうくわうていの事
よりともいとうをおちし事
よりともほうでうへ入給ふ事
ときまさがむすめの事

[illegible]曉文庫

まちぢざうの事
ねあかゞとしとりとん事
せんぎうしよく女乃こと
やあひゞゆめミの事
うけのふがゆめあはせの事
さけ乃事
よりとも山わんの事
ねたぶうろく事
よりとも七騎（キ）おちの事
いぶきがきゝおら事
ひら乃ごんげんれうじやうの事
すゑまつよ京へのぼり事
かさらうの家乃事
八まん大ぼさつのこと

曽我物語巻第二

おやこやくそくの事

三せんせかいはまなこ乃まへにつき十二い
んゑんハ心のうちにむなしうき世をそ
むきしかとも屋まうぬいのちハ
まそかりつへくあらましのこよくら
さかしいとう入道（祐親）ハかあつまてもとの
ゆくゑ乃あらましもくしてしらぬめ
九郎すけきよをよひよせて入道か
いまゝて乃世屋うとおもひおかれゝやうさ

かくひをしめしてみせよとうひの出ゐうき
ゝ中ゆみのぬこゝろあひめもたしくわん
なひしやうとありてみせらへいぬまゐらせ
のようしはをしくわんつけします
御きよしとのはよりてまいらしん
ましとてさしきをそろへぬいくわをな
くしてきこらぬとつもりの出の恩乃こ
らすとも八十よ人のひとふとまても乃
とりふとくあへをしよせて屋つゝの
三郎八内かものとて對ひまかせさ

さい内へのひくへきとて志ゝまを
のとも十よ人こゑをそろへてしの屋と
もうちちらしさしつゝひき内めくらし
さんくよ内せの屋りをふ知まあまく
いわとし屋ゝね内ゐ志ゝハさしあけま
つもて志ゝ乃めめりいのちともちる
事内ゐれもわしうま志ゝよせんのそみ
こゝろぬとひゝてきしちへくのそゝす
志りやゝやつさハちらて戌十年しにうま
屋みつ三十七ゝてうせりものすゑやら

大ふのこゝろしたかのきんとしよせいかにこの
きやうハりとおもひ内のそうきやうめしてや
ちうこゝろをくとまいらせてとをきよめもつぱら
おつまちうきわしとの内のひよおび
つゐてかへしとりてかきのこゝろそく
ひとゝねてもいかゞ三郎ハ二人かうひを
とりてちか入道にはせてきたゆしくをも
あかまひらゆとえんしそゆ世かり
おりやうかにかさい女もよろこふ事
うれしかりしきまゝよハ入道か事と
とふきを屋めおかわかくまゝをとらしにかり
く一かさむしめちしとそみくはもうさて
も屋つきの三郎かちゝハらまうの入たり
しやくしんかめ乃とこむか八しめんよ
おしやうちかのうかとゝ申りそうひの
ゆみわよく手もの八しつゝんのゐめ
りいのうゝとも内の事ハかんちやうけ
ともしらんのおうかとしりあのよせそ
みしねやのゆつゝとむしきすりけよ
内へとふわしさうふしやくしん世まゐし

くしときこえんあらおほこなにとすへくしゆえんなりしにめされわかしめらすひそうの内つきの中へみつしあ大手なかいなら一川おち入て御ひさのうへりとひれわぬとみしかハいたくともなくうせぬまゐらせのかうきなりとて風かくえんかへさせまゐらり大なりの下し内しこゐまゐと中そてわしとさしくの寺そともになくてすおまいあへてれそなくしくしやくえんハうれさせまいらるの内也しやうこうハ乃ちつゝも鳥羽（とゝ）の御寺らよりてせすりしとき大手なからいならまゐりてなき寺さちおなあせんせり御らうねおかて也ハ三月のうらの御かうハ又ハ御なかおとこゑ也をもおれ也りあらせて中とて御寺の目鳥羽とのをかしそてまつて八てうつくすまゐ入てまつかてこれ御かうひとこ中其なつ御寺の目代子そゐるうつのうや御むかんわうちや也

なうちまてくられさせすひぬるやうの
御としミわさなりけるしとはなり

あいさんあくらん乃事

むかし大國り大わうあわうかなとこ
のとまひておちこちへてんを作く
まふなりわもしやかいてんとかし
てあうまに二十ちやう乃くろとをし
ちらみてあるかねをこしりちかは
こん銀なかの手よしてきて風ゝら
くをかあくへりハしやうせんのきゝんを
つけらめにおわのてんらいをさけに
ちくよあかすのさとつかりハみそ
さんこくらくをしまこわめてせふ
あのあわよちんしやのかれひよそく
ゐつまし山伐御まていちんをうまへつめを
かわてハみ○伐うへ水よあらへるえん
まうのゝゑひをへりしやうとのしやう
こんよ如刹しめんゑんしゑわていねふ
す佛留りの風ゝかりもこ迄りハ
志うしとそみくし内迄ハ大わうきよく

らうきんてんよりつねりゆきらん
すわのとき大わうあそはしけらり
いくら二川きうわてなさけさらく字七
日むかの大わうあやしとおもひてそのかたを
めしてうらなはせられけれはうらなへてそ
うらんすけうしらのうらよ七しやく
の人きやわわ大わうのうらをことく
くわうゐうしててうふつのあんをく
あてついもくにおそひんとうわさりて
う鶴人あいいう七百人ありめけりかうか
まみさといふところちら太郎上人よりゆ
てあてあまりいつとこやしくて
まつわのらう屋あまりてとあふよ
あらちすすも任まとりふもあま
つとありやくてあんを屋ありんもんよ
まうせていろくの志よ人をお川める
仲よあやきとめいつみかりもんし
き遣ひとくろくしやすよりて七
百人のてあまとくあしとわ三百人
のらひとまりすりあのうわ四百人きかん

とよりとよ天下くに国をよなりて
よろひかの内のひめかくしてのろと
うしなふらんたんろよろふきぬす
大きくかたちかへいろてわたつ世経の
まうくありてうちからひとまろ
事なりし志もとしくう代あさきせあ
下国しやう第しめのこの世代まふ
ゆへなりもし文まへりわさらしあらは
てんこうきをうけせ下こうをいうらん
しそ三七日とんしますとしあそれは

ゆつよのありあしののひをつまつて
てら一あひこてまてまてなんそしあや
まゐなしハ志よ天あられとすてきせ
いつて仁王經（にんわうきやう）をとうせられてうわ三七日
よまんまうの時七しやうせんせんとあ
まくわみて綿ふ風ありて月日
しやう志悪くひかわと風つきし綿ふ
内裏へそまゐりけるよりまきハなか
つらかりとてのけ四百人ともきりめ
まひぬつてよりつせ文まん無しておる

すなはちかうのひさて御くるまぬちや
うまれなからおますよまなし内裏とも
てうめくの大きやうのこころにてれ
ろうしよせんりのあまくらゐすふ七志
やうとまつりしやうしてんよあかう
をつこ一時り屋さまきこへさいなんのう
あうひとことみへとときさき内くみと
よつまよろしくあらまちよ上らんのよ
う志あくとらう志よてんとしやし
しろくまうかしゝのてんしもとやさまを
てら迄りかたきこそくまの世まで
もいくらかなきさまは内しまて尓を
我くらまくらなひこのきよらかにてなる
内裏七百人のてまかうひ七やうん
せんよくゐゐうかと屋ちゝも御ふす
七なんくくありて七めくくしやのあい
そんりうおひめそとやくまのあいさん
数らん乃まうからぬなかる大ワらの殿と
屋ぬまつすとしまひて御くるね
ちやうせいてんりうかの人志や祐とももす祓

てあらそひけり目得のうけ志りうふ
めらかて風流さをなくきすふるあそ
あらく出波うこゑそて忘まこのは
せりなんあまりひきかしのやめて女
かわしたるなり

よわともいさうにおもひしる
花もくいや忘のすゑとの御代よなあ
すひなハいとうかりてしとても乃
おえさみていり出せる出りあるはよ
かりてゝ乃も忍ハあんへとうのすゑハ

きらくきゆうひまくりてきゝ川める
りあわしも十二のもしい所のらみなる
あ遣て松くしきろよらの女人をうち
女のまて年月をまらかすひさち志
かゝよいとうの源よ也をめ宮人あり一八
内のうふのちへミうし乃すゑう
めあり二をハくとしる一遊すゑつねよあひ
らくまわしよとりみてとゝの御（や）
あ遊（たら）りあそ世かゝ三冊ハ出すて懸るう
わらふえありきる中めも三八ひりん乃

きこしめしてすもとのまきこしめし
てしハのひとまのつゆとしのひてつ
まいらせね御ふちかとも御心さしあさ
かくて年月をおくらすふ程とよろつ
君一人にてまし〳〵ひよのさう

わかきみ乃御事

すもとのわかきみ出生すひし年なの
あなしまうこひ物わしめして御か
とハせんつきこせんとてつけすひせう
つらくわしと物めのまきゝしせうを
わかこふりのかわらせきくよなれはと
ちらりんをうつありてなりうあひな
の上海井の色らそあり御かよはそのそて
まきうられしからよ十あまりなりはちぬ
おかのへみうらぬくをし山うりの
こやをあひうくひ恋もりうけあん
せうわともゝ色かのゝしは女あさんと
もてなしもひうし内きすまふうし年
月ほふのかふわか君三つひりなりぬ
まふきあめのふてゝ京よりゐちうつとめて

くらしなしくしくしく内りのかあなく
くまのに荒ろの山代にておくしまへて
おりふしわうゑめのことにつさう御せんさ
いりあひのかねすゝちにこゑをまてゝ
ましあるとみひろしとも御年よりも
とよとしにかけにもかあやしくおもひ
てすかうち内りのさい女にあひ三つ
ちうの子の捨ゆしき代つきてせん
さいまへあらひつなあるところへ
つとのをせてかけ内かいしまゐやと
かふまへらせのうちにのゆふおりにまゐえ
てうの猪は御めんのさいさやうのあと
よつりまうし内ますふひめゑのつかひか
せいせうのときにそいつりまう殿しくて
まうをすゝめらせんそうらふに御めめふはめ
てうそうまうし御せんにんとおこなしく
つひなりてこしのこそあひしき忠もあ
文志にてまいらせしかなしむそうもあめし
内せんさんせん八国をこうしにしめさせ八
家を屋かさといふことを筆にひさうせて

あさましかりけるしつゝひかへすあちら
こゝろよきさまよろこひておやの
しつかにこやあつめしへをつまて
しらぬあしまもれとりけるはちう
はゝりくへまし、めかしとらせて
けるこそ世よありてあらしれたよわ
ましますへひやうふのすあしのわ
きこえてけりしきめてうらし
きけるよしてはしてさむるあ
まゐてとおとくかはりかこわしき

ひとなとあらかはらすこともつましきを
んしのおん人をとしとわ色にゆかく
めくるてはつうあるまてしくのなと
えうしらせりきてなとんかう
きのすゑとかねとさるてきるとと
程とさそひつゝ人を程せんなうとて
らしとこととうひちせて　つのきこいさ
なひてそりのうちもりはいのほとを
くつねとまちのなへよかてこめうして
まつかさかなるさけなうかしあるかな

こゝやらんせん乃こと家よしやゝよみ
ちていすいをとりゝ給んよおとりてゝよ
おりていくら代めん給くよおくちに海こ
とふ月よあま出てみつまひいゆすゑ
いうとそおもかせろあまりさへ小の淋ら
あとも物りゝみておもはしくふのちゝへ元
まの小宮殿りめんせかわすゝわれら
まつらふすまの志ゝ代おすひてゝれも
もぬうこりいまわゝ新（みい）まらゝかゝしく
るそよらつわらりし御かゝこわそ
とおもひ座ゝ出てゝゐこ遣をとすおちら
（ね）恵けへわらせ西ゝまつるとおもへ
ともさゝ内ゝかりゝんふん三ことまう
みも座ゝゆゝちゝ志よみんかれのとよ
つまひゝふせんよめてまよとみゝらわ
　さゝせんなう筆
むうしんのさゝせんともせゝまさま
とこ四（う）の忘ひすよのゝ継すひしよなゝこ
男の神ハ御手取ゝしてかまおうか
しみすひゆうよさゝせんかうる手乃

あまりにまよひつゝハきりつゝなきこえよし志と
ねりワのすゝしきもしとなくしてきみ
まへことにあふきくわてあみとちま
つまきなれんさくのおりしそくのうしまね
をまらうしてなきとめすりしハ発
ともなくりしともなくきゝわてれめ
くあひまありのせゝらんゐらく乃
みちすつなくをよらくよもの心とも
さくもつまゝねへ神のりのくすりをなめ
きわ楽あひあまゆみのませいをへあみ
てんそゑうらとゆくしんてハうさんふく
と忘のつ作んきそんつくのそうひ乃
此うつまのおもひよ志うゆそうわすゑと
のちワの思うしなくれきおすひし御心
ならくのうちうしなひ多とあワゆゑの
神のなきことうけいようつなわしら
きりなむ

せんそうくわんてんの事

ゆゑはきくのうとの御ワうゑあゐ御な
こゝのありさまをかうしよせんそうくわ

さいよ屋にまいりて申しけるやうはあんの
くさんかへくさの女あふらつゝきぬり
とゝまうひかつゝうしくらむひゝくわろ
ゆゑにてさいごの御おもひはしこしてし
らくのはしよおわせし女のありさまをたつね
ようおりなしさんゆくよつて一天三せん
せかいからねまつわしよくれたまん
さんとうらくかくおうすなうかきらい
きゝうたまうこうよつてきかひよ
ありねこのしくろをとまらせ申さんさな
つまさんせんおのかゝみへきとくろなうねい
かんさうとぬきてはなそうくさ
ゆくまんつゝ女二人ありていゆるわいか
なかくそとうふあつの女のつゝひきし
らくのみやことへゆくはれたよ
まいらまへきちくひまこのらしやさんとて
いかぬとくろいらんかいちんくをして捨
てんよ日ゝたまんとすあくとんせいせん
とひてきりとおつきらくひ出帰ふ
すなわちたゝ屋にまいりひなたみ手ひく

みその中に女七八人ありけるしよりけり
てくえてへいのあんねいをうふもらし
こ海うみこふうひとりてまへくは
おひすへらしやうみのんさしを
ぬまてもしよふ我の時もしこ世ハ
よのつねよおつ拙むらし世よそてす
ゑのりんよいのこりきひのありしきよ
くひ志もくあんしい天御十宮年の
秋七月七日の夜天りありてねかそくハ
ひらく乃鳥ちりあくハねかもくハ遣王

のえさてんちやうちまうかきく修くろ
るなりんと志くすれくせんよ御らさ
ひあつくすとひてきくうひは
さわすひぬもしてかりまりてふくてふ
よれくもんすらの筆ありもしおやまお
なるとそのひやとふふろまかのりわつ
てくれわの国よおまくてわへもん太うや
ら雅とおくちきすゆやうきひハおうくの
あら雅まそへつせすひもろかくら
いまくハすおうりこのとくもとそもは　六

染のすゑとのハつか忍まへの御
ゆくゑとも志らせてましけるものなか
里にハかくれすみふくをなされけり・
とお悦ひハいふまてもなふて
かくてわしもハかめとかの人有れや
とみひろしまふよ安かさす入道わまつ
さへすゑとのをも秋らのしてまり
らんとそらて悦ふをもちをもりてよ
すゑちかし志ふんひとり五郎すゑともよ
とらふよあゐひそかすゑとの人まゐ
とゑかハおやとてハすけちかこそとのよ
ふかひけてまゐらせとらせ給へつんと
内々まかりへハ内へも御のひけんと
とかく悦ひよわしもまいらせめちやうさい
まいらかいよあひもいけるすハ志う
てかの忠とのそらようすとめくハかく
ひかわ人のいらもかなさらん志んふ
のいとめりてかたいまれいたんやうん
とまへハおやかつけ志てまへハ子かわ
かさくめんよみかてわいつさ庭ミ出

あそうろふへこゑとてくらうろけすふるも
なりゆくことハ御ひかゝれないいたく
へゆめてくものうへ手かたちともたつな
くしつハすゝみとよつま人てようらん
よわハなんちそやくよわしもらかくへきと
つとてちく入道りとせうとおほせくさま
さまハすゝめてよらめ御かへておほせの
こくかくしひうき人のらめてハそら
をとりてこうものらひよみてくしん
のらよめうらしもいたちつあらきなわ
えおほしめすも御ことつか御ことの御
ひさしとハおほしめされしていゝやの
ちめりも御こうひことつわなり
かくしもなくもふちくかくつあこて二
しよめハめく非の御ちら候うへゐるゆゑ
屋のらやうかなうくたきこくすめまよか
いのら御きへとハなんと申候さハすま
とのきこしめ大事よ御よろこひわわ
てやうよつけるつすつめきしなくは
いうめもら手やうよあひちつくひけへと

おほせきこいすあまてよろこひあかりて
藤九郎（とくらう）もりなかゝ宿（ヤ）所なりつるとは
兵衛さの屋へまて忍ひつくこえよせ
うきしみ兵は大うけよあさせてれり
しけはかめつかてらへ御しのひ
はつてゆをまく御らりてもやまかりくは
んまたのりはれんとてつきて御まをと
あらりそか

よわかを打てら入すかす
かてすもしのはひそうかたまするおさな
まふしつは八月さしめんの事なるよし申
事もなく風のまとに我身ひとりよ拙
さりしくの人やまくもしの恐れか
打てゝにあられなりあるの月あ
りつまゝ事御よい御をそこしも志て
ねこもとらをうへ尋あのもをつてひくさ
とさけ御とら乃御事せいり
なむしや八まん大ほさつの御ちかひよ
我もりあいよせんしの世とかりそた
うこみちしてこいまとあのませんと

ねうひましませ志うつろよ人すくれうら
わろひてしやうのうわてそうらわ
かもはうわせりらんとらんをひらうは
あさありて家とわこさん屋世もて
りちうきましてへこうめんなりとやく
よわともらめりつとよふまうせとらいとし
あ八人きこえけりのまみとひうらしめ由へ
しうらすは世あてたこうてりの国乃
ひつ梅とうわりせりうくわん海ととゝしめ
らゐへと御きせいよゑりうかりたいさ
御のんわりやいくわとせりしりて御代
よかむすひうわきそとわりてこの宮寺と
きまきゝのとく入すひ一うゝさしうら
あのしてしと月よしゑとくつとちまひ
うさ

ときたゞきやうむすめの事

ゆてゝらのときまさと申は平家のまつらう
といひてもをいりとゆくかりめでたきさんに
くわすとかでてもくわ一もんの大りやうし
うちよむすめ三人あり一人はせんもんちうてい

二十一日の二三ハあやしくみえて十九十七よ
れかはりもその中にもせんさう二十一日ハひ
きんの中にありてとんちう殊のんよ事ひ
けるといはゝ二人とわハすくみえて事ひ
そかふるかしふ事のふ十九の光にみゆる
の葉をそへてうかひその光ハ何くしも
かくあれのうきこねよのかの月日と内の
あやとよれさあへちぬの三河かりあ
頼充さとうさ治しそて事ひそのハとの
こて乃月かりしもそうしと月日と

けらん事あそちし成して庭女の身と
して事ひをもらしすゝにとよみゆきの
葉かりあねこハ志そせすみゝとひそて
ありんとそいれきあさ日こせんのうさ
みえりこ海くとかうかめ二十一のあね
光ハくうくきて海くとにあそうする
葉かりしてゆうせんえハりまよくとん
とんとあめくてまつらゆへ月日と内
のあやとよれさあうゆ文あら荒とうさ
まるハかりせ川みてうせゆくハありと

てきいうしてんきうの御所すきまとそれ
いゝきを

あしかゞのゆらいの事

抑もくあしかゞとのといふはこのころのしやうわ
いみんらう十一代のみたいとすいまんてんきうの
御時よりそ御まちもりと月かんまりわ
みくこもり志かりまこのくらもあかいとこよ
のらありわ三河まつせそらわれわふき
わきくまいまんしゝのあしかゞ殿められ
すいてくさいあい乃わやさまちへくわい
すしわくわ遣いやしのあのとあり
そのよとあさ分ねひまへもわのらかな
きまあのとなりくさいちうらなりしらてよりん
しめとゝふ太きんありぬねいひとまつや
すきやなかいてよわとりとりてまつ
せんとひいてそらくさいようこひわれ
めしてわあいうりのくよきそてすまゝ
とせんしありくさい五月りわかゝすまい
おみとりてわいりあそのあとまてしても
みなまして六月よなりて我のくまわりて

今ハもろこしに十まへせせなゝつ川
将てまへゐしてはもりうせはを
もろこしのまつり事をきさま太すり
よろこひすひもらひもふろのとくり
まいてたし御もんしやわか御くろ
ゆるしもら将ふす百丈年なりけい
うてんよりの御すこ通なりその太し
んの神乃かふらもろこしのくつうきをり
其のをと内のまろ大史かうこよ
さ月もりもろこしのかをいとハ

むかしの人のうへのうへも
とよみくりうりワつてうよもろこしら
うあせうあをはとをしわえちし雨り出ろ
又もろこしよろまりといふなあれこそ
のろもろこしよおれひとしてはをいことへ
しのなつまてあのなりせきのつすう
らうきなりろのしとらしとよはなわ
内なるをは二十乃まゝ女しやなりうさ
いうくよすくましらいわやのまとらひ
なしせつよやせめをけいうしのみかと女

ちゝかせはうしめんしやうおりし事
いくかとなくて月のゑいてまてしらかよめ
此是の御あとの御内き宮らいをうちさめらそ
まりち内しに菅をゝひかしゝうひと
らちやと其ひてしにこのゆあく参くれ
なうし事菅かめよ事ゆあぜミてハ三と
せうくよあ事菅をミてハ七月のうち
よかうゆあしにおゝ事かるつしミありいう
志すゆへ事とそかとしもろ十九の年ミハいつ
りゆとハお其ひをらくてきそしハいうせん
よ事よろしくひて子らいてん屋と大事
りれ乃しにうり内しにうやよあ事菅
をハてんしへ参せんとのあらしとこそ
きらてさふへてんもうとハせんめとすう
事乃やミりうくしてかしゝもうらひ
すてとあり事しに内はらわうふとへの
うらせんわうすへとふものありてこ
皆らくれハへあゆとミまよゆとそうれ
ぬ菅のせとうりくよしれうふ事て是れ
よつく婦ハうミてゆ内くはしゆあをハわうハ

うひとりて御局のなんとのかまそて
まうんとふ月つらゝ事八のとよめ
うらみなり御らあらくハつゝせんと
いひける所にたるとようかうみもへ
えてんもろうまてぬつもしつうつもなし
かるましとゆくしやうふこし所へ所に
いうてよろこひさらかハしきろうの
のちよろやしくハなりなまちしとおもく
もう二十一乃君ハこのことはりつあて々
まてかひくそまうくんめとらめ志よ
ゆくの物なりはとてかりてくのゆ忿よ
つさうかつのうさをしわ助し文うら
あやのこうて一きねろへり所なりかう
十九乃君なのあなりしまよろこひとく
我うふゝ々日よろの志よゆうくうらひ
ぬこのうきのぬしになりぬをころこひ
もうそをろうふろ出来一乃君をもちこ
とふかりんよおもひくゐ所に出うをゆ
つりもうしやわうかみすめとのとき
まさりもむあわまつあうよしまこらし

いとゞめもこゝろ物おもふうちの世ゝなり
物おもひをそ世のあはれみをさとつさちや
とおもひしかなしくへりおひまへたら
ちゝ二人ハことの外あハれ女なりせんちやう大
一のとし御むをなしは物ゆへまいらせ
んとゞめつゝいはれて物おもひしをもち
ちゝゆへなかいなからぬくしもさいちやう
とゝおもひめいさめられて十九のとし
御あとをそのあとゝせんの物ゝ五郎のあ
なりかハらさる成しあはれて御ゝくらふを思ふ

ハあはれさらにことハ筆のつゝあく志よ乃
やまとおりまき物おもひしこともん事あら
高さらまさらは物てらよ内へ御中
あはれお世まひていひけさよ御つりあら
手なら物これならさてまつりをも
しめせ手ハいみてらそとかくてまつる手
とて御あとを二十一のとしそのうすけり
さてせしや乃つれなてまのこせ
二十りのりひめまき御んして物り
めしあとの筆あり出ありつ手して手

もと一門をひきつれ高くらよりこそねの
ちこり御代いさいて寄いてしらさい
うひさのんはときこへにとひさかな
ひらきてみゑすあしの御ふたわ
いれまちこよわさむかとおもへんゆめなかわ
つまらりしはみ代このふてき所よ
とおもひてくらときぬきのちみを
のうまうきたりけふよおくもいてつ
まうとそうさねすひそかうて年月を
よくかすふれとて〳〵の宮尊をき
源氏まゐくわをうらみかめてはまを
まくゆしき大軍おまてわ平家の院え
高はいう兵んと大きよささきまこいれそわ
内のりうし志つうかおもあんすわよと
き源さらせんそくりさのうへ忠代たるれ
いよしとのくまんかうきうのときむこよ
かりくてまつわて八まんとのゝけの志
れんあきこうわうつまみとんしやうおりつ
親す世りうくきかりしとておもひきうゝ
いうく世まうとそおもはかきう

うねめかむこに申けるやう
かくて候てはこの事はいかにせんとおもひ
おり母にやおせられけれハすなはちおしさかりハ
おしとおもひくるしても平家のさふらひに
山寺のちんくわんかねたるといふものをと
うたりしてくるりつちめてなかとな
きうのつ井てに御かんを時もさらむこ
よつさんといひありしことはのちのいなハ
もんしのはめんむこにとりさうりとうり
さふらひてハさいくさのうちかくしいう

せんとおもひけれは此のこゝにつきゝの
めく代のねたるにつひおもせ志てすかね
高むねめとちんくわんりかうゝせうわさ
せてもすもしのかちより是みつゝきもん
一家をもあるそての家乃うらにかけ
おつちつゝめしつるひきゝ女之一命
らてみ年草むしとさるあしによまゝ
せてゆくそとにおしひきの山路をめくし
家もすつゝけの御山にまけ入て宿ひ
ぬちおりくちすハつりもちの非乃ちうひ

ハおさうしよいの世の中ハかゝりしとこそ
まれわすふかきよめのむかしのちや
らてすゑの世かけてまゐらせしかすゝハ
而みとこのかすひそかしとや

せんまうしよく女の事

昔もく川もちの非とやハむかしをいゝ
唐にと以ふ国りおここそはちくやましとや
母をハゆるしとてふか婦のこのありせうる
月よしとおひて程をすゝしめる事な
くしてみちよ主欠りハ忙しきんのみ

けり白氏かもしく月乃おのうゑとう
らみおくりまハ世い天の人をようろふ武
くまりなる手後ようこひあまくもの
程くさををおしとふる年月をそくらし
よするく唐に九千九の年記とんのえま
んとまゆるしよむひゆやうの世月
りとおひてあつるよの人りこて
なかひとかなわしと月代うろるを
こうろるなかるとてひ乃出ゆるしな
うくるをなりしてせんちまうふ志あく

わきひとつの月なこの事あるへかしも
ろしめしに志らんとかねしめはおもて風かう
されてやりやうらしぬきりのちぎ
かをもとしとせなあはれの月をおかきり
みなとて藤井ともへしくなりなるれ
ちまりしこしゆはしはうらに入事を
なくして月よしもかひありきしに
こゝもうまりありて云藤井よもうか
くなりよそう雨之とも女なかとも
よ月よう徴とあしゆへよてんしやの

くいなとけ二月はかりとなりてとかやせんし
しきのく女こゑまりいさいのうちにも
となりあそ志んともあはれにかなし
のうちとまりかすみ御ちからひあのりく
そめなかつ又つくへきくんのうちそれたう
風さんといふ山よりこもりすまゐこう
ろ太子のみつしの小志らんと志らへして
小手山後かたけ入しらさしこゑりい
まゆみぞへしさてすけとのへひそ
うかへをまつらせうとうきさせすりしかハ

むらなあまてきらの山へのわすひもう
そく代ハこうねうてもむ代山ふく入
まひうせ六ちうとよとすゝりねえん
わてゝはちゝすうりめて年月をえと
らわりつてゝらみうまひりいかりわもう
しや文字わら乃てほとしたわ

ともなりつゝゆめうの事

うにふところしまの為にこんのうとものう
ぬこいふそのありこのわを栄楽のすゑとの
いかの御山よ志のひてもしもほらし

院へきゝやうのときしそわりこふとハ
てさめしとて一乗との井よまいりけわ夜
九郎めりゆつのも出家くとのぬかま
かの乗へんはかわよう・らおほしめさて戸
そのかこん屋めりなるゝ君の御さため
よめてゝ手御志せんとそうめりてふへ
御らゝとそはしつて御心と志りめた
ふかまうしめせ君ハ屋くゝらしけよ御
うらをけられしよ一わんなつハこうねの
あいふんさ代てさきねちるハ御さまみ

さしきなりつかはしろかねのおしきよ
こかねの御ゆつきとすへもりなりはしろ
かねのてしよ御ゆつきとまいらせつるよ
恵三てきこしめし候てのちそうね御
さんけいありしよりくろ乃御あしりて
はれとのちゆをとふとみ事の御ありてハ
きらひうしまをふとすふ候の御めしと
りハ月日を厘しめてまつりこしろ
三らんうしらよつてきみるむまよめ
ゆきせすふところてまつわぬとりかさ
ゑすゑとのおさしめしてちまきみよろ
こひすいてよわしもこのありまき安
しきのこゝいむをかしふりつるやさしく
えこゝろしみ山をと三河きゝりてわ
かもゝふさふす代ひ子代らむかゝ
ミ川わかりこゝろしかうし八まん
大わさ川のまめせすふとめのりく
あかゆりしとおかせ御たさ志きめはな
めてたく御きすいとれめてたくなかしく
みけのみつゆあかく世乃奉

ゆゑをうけのふかそぎハそめわけらく
きんよおひてハかものふあらせはんま
川名屋からけよましくそうハ御
せんそ八せんとの御志るんかゝ八ら国
を屋しきとうよさせ候ふ〈まいらわ
御さけきこしめしそうとこりわハを
いわわりたし恵の御あり候ハむかや
のさけみよ花すふわり志うせ云うひハ
御井よさむうきのそへみおの三さん
しをかさかりちくハ三月とはくハ

三年よ御ゐハさきそしとそゆそう
さけ乃事

ゑ為のふうきれてゆそうハさけハ形ゆ
うの時くありとてらを年ハ志てしと
志てしまわ成志てゆさよまりてまま
のぬきやう以中めをみまとゆうすむうし
んのあうていのとき三年んをくり
きせ云ぶよりくゝんおわて志すみ
うと大まよわあおまひて大よいのあ
無ても志うしなしいうせんとうあしこ

すいち此の国のうこいくにせまそと
いふ風しきあるをありけ世ゝ家のその
よ草（くさ）の手三つあんありけるよ水馬つね
りそりめてありふあつしあやしくて
ゆめてしみ世六の手のさりろよしけの
葉ありへつものありけりのけてみつよ
水ならぬあてみ世六ひしめなりすみ
ちらこ世残とりてこてさくよ行く
志のつよ山ひしめ一とくらよふくめは音
らへをかせろくとくありみさとん。しれ
かしめて水とりろ物しとまゝらら
羽残とりらへて記せつものくらり
此くきすへは志らんとくよみうらめ
らへうものはちうしを充めてそすしと
もいふそらなりしすかつら世手えをめ
高一国のうみりうんす草（くさ）の手三つあんお
おき世六とそみ手とゆなりゆてを
このさけいひめてはくらえとそうね
なふ世手そら子ありくやうつもとふもの
ありまくちくとれすく世てこ世をよ

らゝ給ふを入てくち世せの内きしも
くつをもちて乃なくひと給まひな
すへ為内しよらしむかふなくしてよ
木のしりろよ入とき作のち代おかひて
をきえてわせうつしめ入るハかりし仏
なりのちよ入せうハてんらわくてうろ
のあらてをうあてじしもとえなりゆかう
仏く座へんしてくすりとなりとハ
このときあのこはなり文さけとのゝ
宮風の内の事三寸なる三寸仏も
うもり二連云わうのこやのつひ仏う
なりむまのもんをきとい八仏のゆ合も
あさまや文ふかしも万りの世のさゝ
ぬらの木なりてわつきのいを忽よすき
三尺んありきの寺のそてをいとの
屋りわちへ毎りさけしと形のとふ世つ
ありさのしき寺ハ三尺とらく寺ゝ文志んか
しよつくきんしも百座のちやくわ
しもかりきよりハ世寺えみきをえて
天あいをあすくとうせの文志てとい

ひしよのハ七百さいまてはし老とぬ
をとみせんめんきくすいしくまてあ
りひもうをこのさけなりこ是ハかはま
屋しふきんかんの二くのあをまてし山人
よきくの志さゆく水のくすりとあり
もうをこのせんにんハもらひもうとうや
大屋あめもこま代しりしてす屋
のちんとてさけよきくを入てあらひ
しあふへらめくくう也つものめくさ志て
よさしらう月日のひらあまねく光の
御めくみをまてうしかハなかきよはひ
をたもちやしきをさけハいつもひかりす
くまうみをなかしもしかれけをさまん
こんおうしうや患もきこしめ給う
みきのことくよすゑしうきをつまさ
させすし月りん酒をたくさんさせすみ半
給ふの御めしとて光ものたあをきさい
うしまをかへすひもうハあさくし海のこ
思ひしく志らへさせすかたまやゆへ乃
御あひをふ月日を屋しすひもうハ

しもしやうしやうくわうの御こうくもんよ
おひてハうらひあかへりすいとまり
三ゐんうらみてまゐらせハ八まん三志
よのねこわらわんせんしやうもんせ
いとあめらすめへ御すいかたり文を
なくしむすよあやせすひきつかハしも上（いや）
御さいゐ乃ときちうでんのなんめん
よりて天子（てんし）乃御うつわものとして
こころもなくわら（へ）御らんをひく祈
たん事こゑてよおほしとてこゑたかすみとの

よつこいのすいてうゐのみなあそすへこと
くらわしも世よおきうすおそくハゆめあそせ
のゐんたしおうそしそおほせられう

よしもちかんの事

かうそふわしもハてんうばさかさのう
ちふつよくおほしめしけるすいきうかハまて
ひくの御すいかしもおほしめしへ御むね
んの事おほしめしこゑもりこうしせもん
のやうをさすみよくしとへいさんめうの平治（へいし）く
てん禄んようえせんのとふらんさくの信（のふ）わ

のこや二海のそこふかきのりしもを
かゝりてけるあくなるゝしよ
きよめりこ遠能法はちりしくはん乃
けゝと能いうせしかはうきせんしゝ
あいさんしてゐあもちそんしやす
御遠てゝそんよわろて忘いつもよと
なやまゝてまつ平こてんよあらひ
到あまりさん人ろの男一人志りんりあ
すしてかゝもあくも大しや大志ん
のらゝぬなうまくのとくこん忘の太志
しやきやゝあい御ゝよなゝか平りん
ろんよおりてゝせん遠いなしといへ都も
そしあてこのまは見あろ文かりしやゝ
のてんきんを都あ志んあい乃国らんを
らりみゝ我てゝ六千よ志ての三十
よつの国八ゝの一寸くちこやすす又三とゝ九げ
いろてぬ月けつけいんうくのらん志よく大
つまやくこの一きんふさくうやゝのわらの
あまりゝやさしたらとうもなき手よ志ん
ちけいしやゝおわゝさいらきふおこなひあま

さかりなりしを鳥羽どのにをしこあてく
んうかわのちうにまつりてきこしきか
おん〳〵風こうちゝら忠いつもよみたまひ
あんらくさんにて忠やをころしあ
くきやうをうくのくとくの事はなし〈忠〉
んぎやうしをとは八幡かはこうせていのあく
さやいうてめをみまさせんせいときさす
いもん風かてうみおもひてをやうらせを
せはなは白川のゐん乃ぬ二のまうしたら
くらのさやをもん三位入道しらゐ海さ
むかんをすゝめてせつかちせう元年
四月廿四日のあかり川ま志よ國のせんしよ
せうしをうさ河の御つうひ八十郎くらん
とゆおい忠やうおあまき五月八日よゆき
いゑつけのらみ御まひやうこのすゑと
のふせうしをつけてまつかせうし乃
あんをうま風てひさらのらみくらゐ
志さの三郎せんしやうしのおりこの
よしをふせ志らのくうてゑりまゐの
よせつのみもさせうこせまうりてくふ

ゐんのせんし・むほんをくはたておもひしよ
あんをめくらしよとくちよ平家のらうとう
國くによおかわきせんかつくへき・かわ
せう

かねたかゝうくらをす
さてよりともむほんのよし平家（いけ）のきこう
ひかりのちんくさんかねたかまてしらへき
むらちたかうて山手からちよありせう
を八月十七日のよし手まさふしをそへあ
とうて山木の四郎手まつけつせめうと
うしろめたかりけれはさけのらうちら
をさしつかはしてうちとりてこゝにて
うけせんのちへしかたりへからよりいる乃
くみのちゝへ大庭の三郎かけちか平家の
ちゝせんをやせんあかりあいつし
いし山をりけさんくよそうふこ
せのゝむかしはむきしうつけのつはもの
しも我かよしとせむかひてかせ手
そうふろのむかふなるけ山のしきたく
はちく志けらしおちのありしきかりふ

平家の人ゝあまりて京にはめしおかれて
さい中なりけるのしるしとてもしこゝろの
らくせきやうをしりめんとおもひむかひを
おかみゝしあそはしもののむかんよは
きせんとてちせむかひせんかうあへくる乃
ゆひをつふとくろへてゆおあひさんへかり
さうらひけんかしきさうらはさてけ
うのいのちつまてむさしみつちかゝるの
のち江戸かりさはえてあふきてむさし
の国乃ちゝんへしを一千よ年みゝへむとし

よせさんしやうとまいてさうらひかせ
みさうらはせてつまはちすけ一人よ
なりよもりとし九十にあまりけるかし
りんよむかひてゆきけるハ坂東のすけと
のゝちんつまふあはりとのせて一人もし
よのこゝろはゆりまへてまつせと
ゆとおもてちゝこゝろをうんぬきさてとい
ゆゝ入道（にうたう）ハむすめのすけとのみいしや女
ゆきのなりかきうむ一つりせんとそせむ
ひなうかゝ女のよしきてけ山はうゝまなと

みしわりぬせ云ハ内の御山にあひ
きみしうあわ

ふわうと七まちあらの事

内あもとふわしくもハふせいうらみよつあ
仏をしけくおはしまいてもけふつせん
うゐみしとハみへ内うちあ出しもしとふの
次郎をら内まのあし宮郎内まの宮郎ハ
のちはれしちまえすくいわうのひま
よすけとのハのうちすいてすま山よ入
すいぬあてし乃三郎もねとまさあさ
の与つ郎ら出うりすあとのハ七まちよ来
なま飛たくゝハよなりてたあのなうり
うれえのありけま山はしのひおあとの
国つたし内まへつりすふとてふしやうよ
さあみし乃へてつるのか太郎よしのわ
よゆまあふてふねともとこまよせぬうひ
りうりせんのちうふとかうろうしのりハま
ぬうさのいくさふおみすあられし事と
もかうりまし云とふをる内まハ文つりし山
のうりせんよ与一ちうれし事ともとうち

なかひようふひ乃かたをそめてしもかさ
こなあをのらめくわたられ道にわかれりさり
あちらのすゑをとあひてしもひ
りせめのかみすひてゆのこのふかなく
らのなあらめて作まきすひいさご道にわ
こなあしこもくさん三十のまみくせゆるハ
かりありかり内まいへつけ打ごろまさをまな
ひくふりてともかうすといへともあふひハ
鳥（てう）の羽（え）をとをまいて志りかくものもを
又ハせんちやうみこうへむしのしらって
うら打て内のこともありこ道なつくのまよ
あしまらてん申乃つほとしろかわ
むかし志らのかんさいりんちうをうらぬ
んとせしよ打りてんよらを内そゆき
のかるす一ちやうら打り五しきのむまよ
家（のう）へもんあふいりまうりて北の筆と
志めし志ろハかんさらふりうそえ之わ
きかるらゆつよもまきんかてかしくいか
くしてもんうすなちちをやうあり
いかう入道りまうし打筆

かなめをもちをみなまことしいとこの入道ハ
いゝきうしまてむこのみやうのすけよします
こうりありしやう経しやうをせん日のさいにち
のちかうしてめしいとうろひまう
とふとうまてうへをとねらもいら
さいこの十羅んみもをよらすさいたとし
屋しし我をねらひすせんえかうてんの志
よつきやいうらもりのうし我をやうらぬ
志うしんふけよ御ひ屋うしえむさ
んせう経

なかのこんかうしやうの事．
こせやうこんつかやく年中になかのこんかう
我しやうハ大いんち川よ每乃いのり乃
うすめ屋まよの国ふかの屋しろまて屋
くわうゆうんを一七日うせし経せうハ
あくともなくしろハ一人きくりてまい日
御さやうをちやうめんしきうち七日よせん
まうとうなかめのうやと御かつねありさ
是は我ハせ山乃書経（しよきやう）なり七日のちやう
もんよまりうかぬおんらくせういよむまれは

ひたんらかしはよしとてすつまことのなさけ
となりのしからきのとてれしやうのしん
くつらうハ女房つりまつりうちのなせれ
女房ふしめはへとの御へハ大つうちわうの
ゆうしなりしてわつちつゝひさてハなわ
かくはへともありなりうこしやうなめい
と御女すものひんつ月八ゝせはしも女と
ふしはいんと申ゝやとふ所ハせんあ
能みすと御つちやしやありしらハすまさ
ちいな所うとなりて天にあかりあめ乃
ふな年二十と申はりなか内出てもいわらう
状の月ゝけてぬらくへそ形らうせう
れうしやあられすひてゝのつさし乃
わらぬらしくあうして一日ニやなき志よ
しやせし精へりそのほ（のら）ゝのれうしやうの
菩よ御身ふしひよわすあちらしや
志んとてんしして女川女ゝよしやうほと
みくりのめくの五ていしくろよ五川のてら
そろてゝ葉のよありとふなり寺かくハ
見ゝせんし見ゝせんし見ゝ志うゝし

つゐにおしゝつゐらんしこゝろなりけのく
ゐ座まとつゐやこゝにありこんまやゝも
とこそせんにおこゝろすとてそやの〳〵き綾
みやのちておいなあめもこしやをねんふる
うけつて入道ハさいこのとき心もこしや
おもひをねらひあてとうかわこゝろの川
なあすまみしるはかんたかのおやのゆつ
つなはえ山のゝなりすまんさいのあよ
をてゝわしあつまきしよつゐやゝをおく
道つせゆへ夫こゝろゐつしかゆわしとて

おわくそうろうなれはあまは一そんのかうし
せうつゐありといふとも房井にはしやしき
みのそうつゐみちをゆくとやおもひし
なあにおしまゐて事しふかきのこそおわ
きかつゐまゐありみちゝせられたるゐん
ふたのうれ内こゝとりをおほへいかゝして
んちくるに大まうへありし川とき上人あり
とてもかのひを思ふりしすゐにのこらう
あさゆふこゝろに乃きんうをありしめてゝ
ち縁ふしとき上人まいりすふとゆきなは

あまたりて志ろへきとくろありまかと
こ緒とのこまひきりよ此上人のらひさま
迄とのせんしとゆなりてすみちらひ
志りのくひをうちきらぬ太刀ゆあめも
志りく母えてこ殊ららそくその上人
こ郎へとの娘ふせんしよ安うせてまわ
えまりと申太刀太まよう郎とうけ
りなおまふと手よれけの娘うくむ
うし国（こく）はいらち川まて土中（とちう）よありし
なり上人はいわと国殊くろの人なり
志ろるよ子ちと去国をも人生とて心なう
ほうこすまそてかもりのくひをすまき
つまゐれのめんくるのされもして手くれ
きりめんくをいわやなりものとやのこ
まへこてよくいりめんくるとう郎
ことおりくの身さしを除してかのくと
まぬうせ申わせるとやへちそしむ
くひをしろへ手うなりしそ
すけきよ京への子るす
うちはいとこ乃次郎と申もちく入道と一志よ

まてちゝはゝへまことうせておはしていよ
ひとをもよかこのをのかり志きをとゝ
めら殿めうちへまいらせおはせくとき
殿しをおやのをの子なれはそのうへ
うへつゝ山乃川せんよ海さしくまう
あそひてまつんとうらむつひてあら
いのちすてんしもくはひしく女のまれ
うそまつるみ下殿もえん世すさあらんよ
おはしくひをめさせんつそれかま御
をんさるみしとのちよもうりも屋さく

おやはゝこのたひちゝや君をはなれたと
しらすまかりとつきけるをはしら
さへり君きこしめし内はおはしくしくの
さんきよおもはしもちゝのおやを
きりなんは天のせうらんもつしてまう
おちしまいらせまいり九郎かねて
よしつねは御めんありてそうらふ平家へまいり
日君の御うちまいとなりまいらせうろや
内まいつるみしさうらへ御てしも御めら
ひかしぬらひかたきとなりとつふやきを

よりともかはじめてハいこくかまくらへきたとお
ほせられて此道の将ハちかつくとよそもの京と
よのかりなりかりこくてきうう
かくろうあめの何せんのとまき加賀の国
志のもんもてさい收うる何あうと一志
よからる志まして收るうあはよ收く
むらきゆうらいのうるまひゆきやのま
つまこ道り志うしとうあ於しなあもあて
なりなり
まくらの遊乃半

内あもをすもくの小の御うて收りそうあめ
まつりし志まの小四郎をうされなりなの
あるはかりて乃四郎ときあさよあ
ちうゐあくしそ志まの小四郎ともゆされ
このかりうくるるさふうひとも内うとの国
りハそうこのむまのせう太郎の三郎志ひ
なりのせんハ将まのあ四郎何さのくふハ
うりさのすけみちの国りハひてひくう
子うもとちうめしてらふくのさふうひ
五十よ人へそふうれもうの文平家りハ廊まの

あわひとのゝ志うまんのことまてよしとねかん
三位の中将しけひらを南都へわたしてあ
ひハきられ志かハ、ほかくひをとしらすまよ
をよひてすせんしめて御しやてハ三河の
のかみのりより九郎たいふよしつね
きそよしなかうひの國りハ一ての次
郎そくらうわれその入道ひらのかみ
ハ志つこの三郎せんしやうをとしめ給し
なあいよし二十八人うちとられてその百
八十よ人なりけらよ志んゑんのその

ハをりける三人なり一てうの次郎三河のかみ
けりさのすけなりけれハゝらこしうし
そりくるなりしその後ひけるさあるま
くゝよきよ志咲しめてらゝ志てけ
のきをなくへきせんかてとつねもち
こゝやせいらうのとはよりんのふんさう
ハせんひものむまをよ志すんのふたゝかう
うのゝハくらとを屋ことハ草の御代り
志られそりあるのあとハあさゆふのき
ありゆく形りせんちゝ世よいゝ後世は

おほきさきのへいさん國りまきさ
せはまうさんひつめよとくといふすもこの
ゑのときりしうせつめいめうら
御事なり

八まん大ぼさつの事

抑もく八まん大ぼさつといふてきかく
も御うちよつみあるめとくもつさこ道を
ワつらやとかうすひんちんのさいしやくん
よしもくおんへいめんよう乃せきしやな
まゑのすいしやく三寶よちつおいさん

ゑくわうきん三ゑこうのきこうくめいあり
おんちとおほん八ころ三えんのしやうう
ゑやうけうゑしやう三ゑのきりとわう
ちうまつり百ゑうしてんはちうひとれと
しゝ一天せいひ川のめくさせうしも海こ
とふこ道かんてう乃れへつうさせん
しとまのりすみてうやせんせおんさんのく
うゑんゑくきんとんせうしきんつせまと
も継かこしやうせん志よ乃つらやくいもり
風うしもわ川のちうひと那うらく命ふ

あふまてもたんする事ハまりとも御神
なりわちかはまのくにのあめよせうちやう志ゆ
かんとこんつうしすふつほうの大ひあうこ號
なり其のわたしやあまくもの浅わつせう
志禄ふかりかくきやうくわんときやうそ
うませいたりのひさしくそやくすゑやうめ
家あせんこんをみたくあいかりしもちゐ二年
九月四日よねかりうせいかやうくんのかん
をうろかりきんまうらん年十一月七月よ
しやうらくしてあいなすこんよふあ

き十二月五日より大しやうにゐんする御座ハ
ちくかくをいそうのうちよあくらしかり
事をよろしのわかよえくわせあやもろう
りいりの国りかさいせつかり時の内七
とハあまつちおひりん一天四海をしつさん
なりひあくくさきをかりくわりまとやし
きのくとはよてんかおん祿ハかけかしきと
けいしやくをわらひすとハつまつくそうひ
しかれくり平家たんしやうの勢りかしハ
あせやのくへかけつきんをかりつおきみとハ

おもひきりたる内侍もいりの御山にて髪
そのこりし惣しくハおほせにてまつわ
しものハせんしやうにありけり時九郎
わりなからハうつけのたゝ内ハふしにおさき
おさけのふハつゝや乃をり侍ゝ志んめん
若ゝらんを御たろうへよ大ゝのみゝわや
ハせんそりハ侍いくあまさよりつゝ侍わし
をこんとハ一をんりう侍つりたりけれハ出わゝや
うそん五六ゝ家し侍ゝりてゝをんり
おもひきり内侍もせん年のちゝりの三郎
をうらきりしくとう一郎すけつねハさ
ゑもんのせうになり侍いとうをまうつ
若のおりゝ志よりやうあまりさいつらやう
し侍すいふんこりものゝちゝ承念
の御ろはさらしらうす内也時も
きりをかゝわたしわハ天よあうりて河也
き残さうくとい入ても又ちよおりゝ元れ
ありつりをふむらかハふ手かちよ
入て村残かとい入ても河井わたくるよ
あうらせへありすゝつねもうやうみく

おりみてふあくはしのこりおもかさ
か内もりれひくとみてもかき手あの身ハ好
すゑのれうくしくて硯井まうれな
んとて

ゆきの